現代国語学の開拓者
李崇寧 Yi Sungnyeong イ・スンニョン先生

李秉根 Yi Byeong'geun イ・ビョングン
ソウル大学名誉教授

1

心岳 Simag シマク*李崇寧先生！　あの方は心が堅固で駆け抜ける力がなければならないという「心如五岳（心五岳**の如し）」のように一生を生きて行こうと非常に努力された方である．しかし周りでわれわれが見ることができるように，お気持ちがしきりに軟弱になって息子のような弟子たちをとても懐かしがられた姿を見せたりもした方でもある．少年時代には心と体がともに弱かった方という．

*【注】「心岳」は李崇寧先生の号．姓名の前に出すが，敬愛をこめて号だけ，あるいは号に「先生」を付けて呼ぶこともある．

**【注】中国の五岳に似せて朝鮮の五岳として例えば東岳-金剛山 Geumgangsan クムガンサン，西岳-妙香山 Myohyangsan ミョヒャンサン，南岳-智異山 Jirisan チリサン，北岳-白頭山 Baegdusan ペクトゥサン，中岳-三角山 Samgagsan サムガクサンなどを当てる．

先生は一生を駆け抜け，現代国語学のいろいろの分野を一つ一つ開拓していこうとした方である．あの方は明らかに波乱万丈だった現代が作り出した，すなわち現代国語学の泰斗でいらっしゃる．一つの時代には誰かが代表としてその時代の証拠となるものだが，あの人はまさしくもっぱらそうならなければならなかったであろう努力を傾け，行跡を残すのである．もしもあの人があのようなことをしておかなかったならば，他の誰かがもっぱらあのように生きていかなければならなかったのだが，歴史は決してそのような人物を抜け落とさず据ええてから通り過ぎるのである．まさに李崇寧先生がそのような歴史の中のおひとりであろう．

2

李崇寧先生は大韓帝国 Daehan Jegug テハン・チェグク隆熙*年間の 1908 年（陰暦 6 月 7 日）にソウルでお生まれになり，1994 年（2 月 2 日）にお亡くなりになったから，大韓帝国（日本統監府**の時期），朝鮮総督府時代***，米軍政府****と自由党*****の時期を経て四・一九******と五・一六*******の激変期をお過ごしになったので，いかほどに波乱万丈の歳月を経験なさったことか．特に六・二五動乱********という韓国戦争の悲劇は言うまでもなく学問の道をもっとも困難にした事件の一つでもある．

*【注】隆熙は大韓帝国の年号．1908 年は隆熙 2 年（純宗 2 年），清光緒

33年，明治41年.

**【注】1905年韓国統監府（伊藤博文統監），1909年伊藤統監暗殺.

***【注】1910年8月22日-1945年8月15日．韓国では日帝強占期と呼ぶ.

****【注】1945年9月18日-1948年8月15日在朝鮮アメリカ陸軍司令部軍政庁.

*****【注】1948年8月15日大韓民国樹立から1960年4月26日までの第1共和国の時期．自由党は李承晩 Yi Seungman イ・スンマン大統領（第1代-第3代）の与党.

******【注】1960年4月19日自由党による不正選挙に反対する韓国学生たちの運動．第1共和国の崩壊をもたらした．学生革命とも言う.

*******【注】1961年5月16日朴正熙 Bag Jeongheui パク・チョンヒ氏らによる軍事クーデター．朴正熙は第5代ー第9代大統領となる（第3共和国と第4共和国）.

********【注】1950年（昭和25年）6月25日北朝鮮韓国に侵入，全面戦争勃発，1953年7月27日休戦成立．韓国では韓国動乱とも言う.

韓国動乱の頃まで先生が困難を克服するように常に激励してくださり，精神的支柱となってきた方は先生の御尊父だったが，旧韓国*末期に従二品嘉善大夫に登った春沙 Chunsa チュンサ李炳觀 Yi Byeong'gwan イ・ビョングァン（1858-1949）翁である．お気持ちの弱かった先生に泰山の如く力強く生きよと「心岳」という雅号を付けてくださった方も先生の御尊父だった．心岳先生は御尊父についてこうおっしゃった.

*【注】旧韓国は大韓帝国のこと.

「わたくしの遺伝的な体質でも学問と性格でも亡父はわたくしをもっとも寵愛し，将来に希望を掛けさまざまな遺訓を下したので，わたくしは精神的な遺産を思い切り受けたのである.」

ー ＜春沙公実記＞

次の中国の宋代の詩人山谷黄庭堅の処世訓を教えてくださった方もやはり先生の御尊父だった.

徐徐無欲速　世間のことはゆっくりやって急ぐな

汲汲無敢惰　勤勉に行い，少しも油断せず怠けるな

心岳先生はこの処世訓を一生の間心の座右の銘のように大切にしておられたが，ここに『禅家亀鑑』にあらわれる「心如木石者　始有學道分（心木石如き者にして始めて道を学ぶ分有り）」という句も反芻して一筋に学問の道を歩まれた

のである．筆者にこれらの句を書いて教えてくださった時は筆者が最初の著書『음운 현상에 있어서의 제약（音韻現象における制約）』（1979）を持ってお伺いした時だった．その時が30年代後半だったが，どういう意味で書いてくださったのか瞬間的にいぶかしい思いが生じたようである．恐らく先生が筆者のその歳になるまでお気持ちが弱いことをもどかしがっていらっしゃったためだったろう．

御尊父李炳觀翁は延安 Yeonan ヨナン*李氏14世延原 Yeonweon ヨヌォン府院君**海皐 Haego ヘゴ李光庭 Yi Gwangjeong イ・グァンジョン（明宗7年1552～仁祖7年1629）の後裔であり，慶科別試***に及第し，副修撰****の官職を始め奎章閣*****祗候官に登り，1910年には勅任二等に昇進し，先に述べたように李朝時代の品階で従二品嘉善大夫に登った方である．この延安李氏の一族は三陟 Samcheog サムチョク公派******に下って来て李光庭のような人物を出すに際し京畿道 Gyeong'gido キョンギド坡州 Paju パジュ市條里 Jori チョリ邑弩造里 Noejori ヌウェジョリ(Sonyuweol ソニュウォル)の氏族村を形成して来，この一族の先祖の墓がそこの近隣の墓の中で堂々たるものである姿を見れば，両班 yangban ヤンバンの一家であったことを知り得る．京城帝大学籍簿に両班として記録されている．京畿道坡州でありながらも栗谷 Yulgog ユルゴク*******を継ぐ西人系統を継がず南人の一家として李朝末期に勢力を失ったが，学問を大事にした一家だったという．ところで心岳先生は高宗時代父親の勤務地の関係で坡州で生まれず，ソウル（京城府 Gyeongseongbu キョンソンブ水下洞 Suhadong スハドン39）の母方の家で三男として生まれたが，鍾寧 Jongnyeong チョンニョン，植寧 Signyeong シンニョンに次いで生まれ，弟は益寧 Ignyeong インニョンだった．ソウルに住みつつ先生とともに教育者の道を歩んだ兄弟たちがいた．

*【注】祖先発祥の地（本貫）は普通姓氏の前に置く．

**【注】李朝時代王妃の実父あるいは正一品の功臣等に授けた爵号．

***【注】李朝時代慶事のあった年に特別に行う科挙．

****【注】弘文館に属し，経籍と文翰を扱う従六品の官職．

*****【注】王立図書館及び記録所．

******【注】三陟は江原道 Gangweondo カンウォンド南部にある．

*******【注】栗谷は号．**李珥** Yi I イ・イは朝鮮の有名な儒学者．

幼くして御尊父から漢文を学び輔仁 Boin ポイン学校と梅洞 Maedong メドン公立普通学校（この時戸籍係の間違いでひと時「李慶福 Yi Gyeongbog イ・ギョンボク」と名前が変えられた）そして京城高等普通学校を経て京城第二高等普通学校（京福 Gyeongbog キョンボク中高等学校の前身）に入学・卒業したのだが，この時までも体が虚弱で，先生は水泳，スケート，剣道，乗馬等の運動をして体力の鍛錬を熱心にしたという．晩年まで登山をして体力を維持なさったが，青少

年の頃の訓練のおかげだった．晩年の登山についてこうおっしゃった．

「昔ならサランバン*で咳払いでもして大人（たいじん）らしいふるまいをしなければならない歳なのにリュックサックを背負い，……登山帽の後ろにのぞく白髪が恥ずかしい時もあった．しかしこの登山だけはわたくしには贅沢でもなく，必ずわたくしの勉強のためにともに幾久しく続けなければならない自分の修養でもあるのである．」

—＜登山と学問＞(1965)

*【注】sarangbang（舎廊房，斜廊房）．朝鮮家屋で客間を兼ねた主人の書斎．

すなわち登山のような運動で培った精力と体力を学問にそっくりそのまま注ぐためにこのように登山を持続しようとなさったのである．学問への並外れた執着を見ることができる．

第二高等普通学校を卒業後3年目に1928年京城帝国大学予科文科（B組）に合格なさった．そして2年後予科の卒業論文として「許夫人蘭雪軒*」という李朝時代の文学論を書いたが，学科の教授たちの賞賛を受け，学者としての資質を認められたことにより学問の道を選ぶことになったという．1930年本科に進学し，社会科から直ちに文学科の「朝鮮語学及び文学専攻」に移り，明洞Myeongdong ミョンドン**のカフェー等に出入りし，青春も楽しみつつ英語とドイツ語は勿論フランス語，ロシア語そしてギリシャ語まで勉強し，専攻の学問すなわち国語学に邁進した．当時わが国の一つしかない大学である京城帝国大学に入り法学を治めて李朝時代以後最高の道と考えていた立身出世の道を歩まず「朝鮮語学」を専攻しようという消息を聞いた今や力ない南人の一族の大人たちにはちょっとやそっとの失望ではなかった．家に押しかけ，大騒ぎになった．

*【注】許蘭雪軒 Heo Nanseolheon ホ・ナンソルホン(1563-1589)．蘭雪軒は号．李朝の著名な女流詩人．本貫は陽川 Yangcheon ヤンチョン，江陵 Gangreung カンヌン出身．

**【注】ソウルの銀座通りに当たる．

「こら，崇寧！　朝鮮語学科を選んだって本当なのか．こいつ！　あの難しい帝大に入ったら法科に行って将来道知事にでもなるべきなのに．何の希望があって朝鮮語科を選んだのだ？　乞食稼業するはずの科を選んだのだ？」

「男なら立身して名を挙げなけりゃ．出世してこそ家門を起こせるのだ．」

英祖，正祖朝以後勢力を失った南人の延安李氏の一族では一家を再興することを待っていた希望が崩れたような思いだったろう．さらに朝鮮総督府のもとで民族語を専攻するということは大人たちには大きな危険と感じられ，大きな不安を抱いたであろう．しかし「わたくしが学者として今日に至ったのはひたすら亡父の家庭教育が溫威を兼ねて学者としての資質の涵養に努力してくださっ

たおかげ」であると心岳先生が信じたように，この時も御尊父だけは「おまえがよいと決めたならおまえが自信を持って努力しなさい.」とおっしゃったという．当時韓国に関する研究をするということ自体が愛族だったことは勿論である．

3

李朝時代の漢字中心の性理学的言語研究についで開港期以後滅びゆく国権を回復するために言語研究は愛国啓蒙思想によってその時代の言語の秩序に合う「國文之法」であるハングルの当時の文字体系の再鼎立と新しい正書法の確立のための考えを繰り広げて研究しようとする民族運動が起こった時期に心岳李崇寧先生は生まれた．ちょうど大韓帝国の学部に設立された国語研究所（1907-1909）で時代に合う新しい文字体系を確立しようとした時期だった．その後朝鮮総督府では植民地教育のための教科書編纂に活用する正書法の整理に力を注ぎ，国語学は依然として愛国啓蒙運動の一環として主に規範文法の整理に努めた．このような流れの中で心岳先生は近現代教育の象徴だったという「大学」の予科に進学し，予科文科（B 組）卒業後，本科に進学し，史学，文学そして語学を前に専攻の選択に悩むうちに社会科からまさに文学科の朝鮮語学及び朝鮮文学専攻に移り，語学専攻を選んだのである．

日帝の植民統治下で心岳先生は文学部の一人の若い日本人言語学者小林英夫 Kobayasi Hideo*（1903-1978）教授の「言語学概論」の講義を 1 学年の 2 学期に受講して民族主義的イデオロギーの側よりは西洋の言語科学的研究に大きな刺激を受ける．西洋，特にソシュール，イェルムスレウ，ヴァンドリエス，グラモン，イェスペルセン，パウル等当時のヨーロッパ言語学の代表的な学者たちの理論に接することとなり，その方法を考慮して朝鮮語音韻史研究を始め国語史研究のいろいろの分野を発展乃至開拓しつつこの方面の開拓者として金字塔を立てることとなった．李崇寧先生の持論「国語学は個別言語学である．その国語学が個別言語学として存在すると同時に一般言語学であり得る」すなわち言語学と言語学の普遍性と特殊性についての考えも小林の影響を受けた当時のヨーロッパ言語学だったのである．大学での「朝鮮語学」専攻の教授は小倉進平 Ogura Sinpei**教授がいた．すべて資料収集とその解釈程度をする水準だったので，興味を感じられず，言語科学的刺激に深くはまったものだったという．

*【注】(1903-1978). 1927 年東京帝大言語学科卒，1928 年ソシュールの『一般言語学講義』を『言語学原論』として世界で最初に翻訳，1929 年京城帝大講師，1932 年助教授（ギリシャ語，言語学），敗戦により東京に引き上げ，1948 年東京工業大学教授（フランス語，言語学），1950 年名古屋大学教授兼任，1963 年定年退任，早稲田大学教授，1973 年退職．

**【注】(1882-1944). 1903 年東京帝大入学，言語学を専攻，東京帝大国語学研究室助手，1911 年朝鮮総督府勤務，1924-1926 年ヨーロッパとアメリカ留学，1926 年京城帝大教授，1933-1943 年東京帝大言語学科主任教授．1920 年『朝鮮語学史』，1929 年『郷歌及び吏読の研究』，1944 年『朝鮮語方言の研究（上・下）』（遺著）．

当時 20 世紀前半の言語学は言語学という分野が形成された 19 世紀以来すべてヨーロッパのものだった．それは民族主義的言語学についで登場した歴史言語学であり，構造主義の言語学が芽生えた時だった．アメリカではやっとボアス（F. Boas）等の人類学からブルームフィールド（L. Bloomfield, 機械主義的分析），サピア（E. Sapir, 心理主義的解釈）等が出遅れて独立した言語学を叫んでいた時だった．それでこの新しい学問としての言語学が 19 世紀末葉東洋に受容され始めた時は勿論ヨーロッパの歴史言語学だったのは自然なことだった．1920 年代中盤成立した「大学」で新しい学問としての「言語学」が開設されたのである．「朝鮮語学」専攻として意を決した学生「李崇寧」は小林教授からフランス語を知らなければ言語学をするなと言うことに刺激され，当時言語学の中心地フランスの言語すなわちフランス語そしてヨーロッパ言語学を勉強して原書を通じて理論的知識を獲得し始めた．このような過程の中で『朝鮮語文学会報』に言語学用語等を整理した短い文を在学中 7 篇も発表した後輩の学生李崇寧を見守った専攻の助手陶南 Donam トナム趙潤済 Jo Yunje チョ・ユンジェ*先生はこの学生李崇寧に特別な関心を置いたが，学生李崇寧は陶南先生に「これから君が朝鮮語学に責任を持ちなさい」と勧められて語学の勉強にますます邁進することになったという．陶南先生は助手からすぐに京城師範学校教授に移られ，学生たちの方言調査を指導し，『方言集（1,2 集）』を刊行することになった．このような過程を経て卒業論文として音韻史研究に属する「朝鮮語ノヒアツス(Hiatus)現象ニ就イテ」という 400 枚の分量の大論文を提出，多くの称賛のうちに最高の成績をお受けになった．それまでの国語学で見られなかった現代的な言語研究のテーマだった（独立後この論文は『震檀学報』15 号に発表された）．

*【注】（1904-1976）国文学者．成均館 Seong'gyun'gwan ソンギュングァン大学大学院長，嶺南 Yeongnam ヨンナム大学教授

4

大学を卒業した 1933 年に李崇寧先生は研究室に残り，ソウルで学問に精進したかったが，高橋亨 Takahasi Tooru*教授が平壌 Pyeongyang ピョンヤン師範学校教諭として推薦し，紆余曲折の末何か月か後から平壌で教鞭生活を始めることとなり，異郷生活の 13 年後に祖国の独立をその地で迎え，上京なさることとなった．平壌は 13 年近く学術的な雰囲気がまったくなく学問研究とは距離が遠い

ところで過去に妓生（キーセン）たちの牛耳る遊興の都市だった．ここで先生は周囲の誘惑を退けてドイツ語の原書を通して方言学等の言語学の勉強をし，ドイツ語の勉強も続けた．

*【注】(1878-1967). 1898 年東京帝大文科大学漢文学科入学, 1902 年卒業. 1903 年大韓帝国の招聘により官立中学校教師. 1909 年『韓語文典』, 1910 年『朝鮮の物語集附俚諺』, 1911 年京城高等普通学校教諭, 1916 年大邱高等普通学校長, 1921 年朝鮮総督府視学官, 1923 年京城帝大法文学部朝鮮語学文学第一講座教授, 1940 年京城私立恵化専門学校長, 京城帝大教授退官. 1949 年福岡商科大学教授, 1950 年天理大学教授.

心岳先生がここ平壌で歯を食いしばって初めて準備した大論文が『震檀学報』第 2 号（1935）に発表した「魚名雑攷」と『新興』第 8 号（1935）に発表した「ウムラウト（Umlaut）現象を通して見た「、ᄋᆞ」の音価攷」だった．いわば前の論文は無条件で外来の理論に従ったものではなく，「方言から見た魚名」，「魚の語源探求」，「漢字の魚名とその解釈」という語彙史すなわち語源研究をするのではあるが音韻史と成語史すなわち造語史と語源史が総合された研究を試みた論文だった．方言，漢字語と『鶏林類事』等の各種の文献上の資料を含み，完全に広範囲な資料中心の解釈であり，語彙史研究に属する．解釈のためここではレーヴェ(R. Lœwe)の『ゲルマン語学』，キーッカース(E. Kieckers)の『世界の言語系統』のうちアルタイ語資料と『蒙漢辞典』が登場したりもする．後に論文では学部の学生の時概念を紹介した先生が一生の間志向した広範囲の資料に基礎を置いた機能的推論と広範囲の参考文献に基礎を置いて編み出した言語研究の方向が感知される．この論文が 1934 年に発足した震檀学会の学会誌『震檀学報』の第 2 号(1935)に発表されたが，本格的な近代的論文集としては国内学術上出発点となる論文集と言える．多くの実証的研究論文が現在に至るまで収録されるという特徴を持つ．ここで上の論文が発表されると時を同じくして先生は 1939 年にはこの学会の委員（現在の「理事」ほどに該当）として学会と学報，そして友人たちと一生の間深い絆を持ったのである．後の論文はウムラウト(Umlaut)現象と音韻史をつなぐ研究で，統合的現象を連合的研究に結合して試みた音韻史研究であるが，収録雑誌『新興』は京城帝大の同窓たちがつくった雑誌である．当時は論文集がほとんどなく，この雑誌に論文を発表したのだった．

もっとも本格的な李崇寧先生の論文として国語学界で評価されている初期の論文は「朝鮮語の異化作用について」（『震檀学報』第 11 号，1939）と「Umlaut 現象を通じて見た「、ᄋᆞ」の音価攷」を経て発表された「、ᄋᆞ音攷」（『震檀学報』第 12 号，1940）で，現代国語学の起点として評価を受けて来た論文である．すべて音韻史研究としてヨーロッパ言語学の理論と方法を土台に置き，広範な国

語資料を活用している.「ᆞ ɐ」の音価と母音体系の関係の研究は国語学史上の記念碑的な名著と呼ばれる『朝鮮語音韻論研究第1集「ᆞ ɐ」音攷』(1949)に修大成された. 1942 年に朝鮮語学会事件で学会の多くの指導級人士たちが検挙されると, 震檀学報, 朝鮮語学会等は学会誌を発行できなくなるに伴い, 韓国人の論文発表は残念にもほとんどなくなってしまったのである.

5

1945 年独立の日がついにわれわれの前にあらわれた. 独立を異郷平壌で迎えた心岳李崇寧先生は独立記念式で「われわれは日帝の圧政から解放されたのです.」と万歳を叫び2日後に上京して御尊父に挨拶申し上げ, 趙潤済先生を訪ねることとなったが,「李君も平壌師範で月給をもらったのだから自粛しなければ」という言葉を聞いたという. 過渡期の体制として出発した京城大学予科部長玄相允 Hyeon Sangyun ヒョン・サンユン教授*の要請で 10 月 1 日付で予科教授をお受けになった. 白樂濬**Baeg Nagjun ペク・ナクチュン教授についで法文学部長だった趙潤済教授は「専攻学科の教授をやらなければ」と言ってお叱りになったが, 1 か月余りたって法文学部助教授に発令された. 翌年教育制度の改変に伴い国立ソウル大学校文理科大学国語国文学科教授を予科教授と兼職することとなり, 国立ソウル大学校が開校するに伴いソウル大学校文理科大学国語国文学科教授に変わることとなった. 予科部長まで引き受け, 勉強に大きな支障となったが,「国語学は言語学である」と考え, 独仏語の原書を相手に講義ノートを明け方まで作成し, 用語を英独仏ラテン語で猛烈に訓練させ, 引き続き弟子たちを教え, 震檀学会等の学会活動もしていき, 夜も充分には寝ずに「母音調和研究」(『震檀学報』第 16 号, 1949),「「애 ai・에 əi・외 oi」の音価変異論」(『ハングル』, 13-14, 1949) 等大中小の論文を執筆し,『古語の音韻と文法』(1949)と先に言及した名著『朝鮮語音韻論研究第1集「ᆞ ɐ」音攷』を刊行なさった. 当時あった「ᆞ ɐ」の音価をめぐって繰り広げられた崔鉉培***教授との学術論争は韓国学術論争史に残った大きな事件だった.

* 【注】(1893 年 6 月 14 日—1950 年 9 月 15 日). 高麗大学初代総長. 朝鮮戦争の最中北朝鮮に拉致されて行く途中で被爆して死亡と伝えられるが, 詳細は不明.

** 【注】(1895 年 3 月 9 日—1985 年 1 月 13 日). 平安北道 Pyeongan-Bugdo ピョンアンブクト定州 Jeongju チョンジュ生まれ. 1945 年 8 月 22 日京城大学法文学部長, 経済学部長兼任, 1946 年延世大学校初代総長, 1950 年大韓民国文教部長官［文部大臣］, 一時国務総理［首相］, 1962 年国会参議院議長, 1961 年延世大学名誉総長.

*** 【注】(1894 年 10 月 19 日—1970 年 3 月 23 日). 慶尚南道蔚山 Ulsan ウ

ルサン生まれ. 京城高等普通学校卒業後周時経 Ju Sigyeong チュ・シギョンの朝鮮語講習院で研究，1919 年広島高等師範卒業，京都帝大文学部卒業，1926 年延禧 Yeonheui ヨンヒ専門学校（後の延世 Yeonse ヨンセ大学）教授，1941 年 10 月朝鮮語学会事件で日本敗戦の 1945 年まで獄中にあった．独立後文教部編修局長，教科書編纂に従事，1954 年延世大学校教授，同文科大学学長，1959 年退任．ハングル学会理事長．

またこの頃蝶の収集と研究で著名な昆虫学者石宙明 Seog Jumyeong ソク・チュミョン*教授とともに於青島 Eocheongdo オチョンド**等西海 Seohae ソヘ地域を踏査して方言採集をし，学生たちとともに，そうでなければ親戚の家を訪問して方言採集をなさったりしたのだが，遅れてその方言資料を尋ね，それ以後の一部の採集資料を一か所に集めて韓国方言学会から『李崇寧の方言採集資料』（太学社，2014）を李秉根，宋喆儀 Song Cheoleui ソン・チョリ，鄭承喆 Jeong Seungcheol チョン・スンチョル，鄭仁浩 Jeong Inho チョン・インホ，韓成愚 Han Seongu ハン・ソンウの解説とともに刊行した．済州島方言の採集は六・二五戦争中に総合学習踏査***の一環として始めた作業で「ㆍ ᄫ」の音価と関連した母音史研究に大きな支えとなった．またよく知られた報告研究として『제주도 방언의 형태론적 연구（済州島方言の形態論的研究）』（1957/1978）があるが，これは事前に徹底して準備なさった調査票に従って済州大学の玄平孝 Hyeon Pyeonghyo ヒョン・ピョンヒョ教授等の協力を受けて文法資料を採集した成果だった．

*【注】(1908 年-1950 年 10 月 6 日). 1921 年崇実 Sungsil スンシル高等普通学校入学，翌年開城 Gaeseong ケソンの松都 Songo ソンド中学転校，卒業，1924 年鹿児島高等農林卒業，母校松都中学の生物の教師をしながら蝶の研究に打ち込み，朝鮮，日本，北京，モンゴル，樺太にも足を運び，この研究では世界的にも知られた存在だった．その後京城帝大医学部付属済州島生薬研究所長という職を得て，済州島では生薬，昆虫学の他に済州島 Jejudo チェジュドの方言，民俗学の研究に打ち込み，またエスペラント活動でも知られていた．独立後国立科学博物館動物研究部長．韓国山岳会副会長．まことに痛恨の極みだが，朝鮮戦争の最中ソウルの街角で人民軍少佐であろうと因縁を付けられて銃殺され，膨大な収集物もすべて戦火に消え去ったという．ソウルの檀国 Dan'gug タングク大学の石宙善記念民俗博物館（現在在竜仁 Yongin ヨンイン市）の石宙善 Seog Juseon ソク・チュソン氏は石宙明氏の妹さんである．

**【注】全羅北道 Jeonra-Bugdo チョルラブクト郡山 Gunsan クンサン市沃島面 Ogdomyeon オクトミョンに属する．西海にある．

***【注】学生を引き連れて行う実習を兼ねた調査旅行．主に夏に行う．

民族最大の悲劇六・二五動乱のうち避難地でも李崇寧先生は生活が困難なのは勿論，研究資料の貧困のような悪条件を克服なさりつつ新しい論文を引き続き試みられた．この頃アルタイ語との比較研究の可能性を示したりもし，古代国語形態論研究も試みられ，方言研究の重要性を強調なさりもした．戦争中に釜山 Busan プサン*で新たに創立した歴史学会の会報『歴史学報』と国語国文学会の会報『国語国文学』にも論文を発表なさったが，後に新たに補完して改稿を発表なさりもした．戦争前にソウルでも国学 Gughag クッカク大学**兼任教授をしばらくおやりになったが，戦争中も李崇寧，方鍾鉉 Bang Jonghyeon パン・ジョンヒョン***教授ともに東国 Dong'gug トングク大学****兼任教授をおやりになった．当時は勿論だが，しばらく兼任教授の制度が持続したのだが，これは多分大学によって資質ある専攻の教授の補充がたやすくなかったためではなかったかというように思われる．

*【注】釜山は韓国第 2 の都会．1914 年慶尚南道 Gyeongdang-Namdo キョンサンナムド釜山府，1949 年釜山市，1950 年-1953 年大韓民国臨時首都，1963 年釜山直轄市，1995 年釜山広域市．15 世紀初に富山 Busan プサン浦に草梁 Choryang チョリャン倭館が置かれた．

**【注】1947 年ソウルに出来た私立大学．1966 年友石 Useog ウソク大学に統合，1971 年高麗 Goryeo コリョ大学に併合される．

***【注】(1905 年 6 月 3 日—1952 年 11 月 18 日)．平安北道 Pyeongan-Bugdo ピョンアンブクト定州 Jeongju チョンジュ出身．1928 年京城帝大文科入学，独立後京城大学及びソウル大学国文学科教授，1951 年 12 月ソウル大学文理科大学学長［日本の学部長］．古語，方言等に業績がある．1947 年には独島［日本名：竹島］学術調査団に石宙明氏らとともに加わっている．

****【注】1906 年明進 Myeongjin ミョンジン学校，1910 年仏教師範学校，1914 年仏教高等学校，1915 年中央学林と改称，1922 年三・一運動のかどで廃校処分，1924 年開校，1930 年朝鮮仏教専門学校，1940 年恵化 Hyehwa ヘファ専門学校，1946 年東国大学，1953 年総合大学に．

戦乱の混乱が収まり，だんだん研究状況が安定していった．1954 年には全国の学者たちの投票により第 1 回大韓民国学術院会員となる栄誉を得られ，『国語学概説（上)』（進文社）と『古典文法』（乙酉文化社）を著述なさり，翌年には当時までに執筆した主要音韻論関連の論文を集めて『音韻論研究』（民衆書館）を刊行なさった．一方中世国語中心から古代国語研究に拡大し，形態論研究を開拓していき，また「世宗の言語政策に関する研究」のような国語学史関連の論文

も登場し始める．1960 年に再び音韻論，形態論，意味論等の関連論文を『国語学論考』（東洋出版社）に収め，その間発表した造語論（Wortbildungslehre – Word formation theory）関連論文を『国語造語論攷』（乙酉文化社）に収めて刊行した．心岳先生はヨーロッパの伝統的な言語学におけるように形態論（Morphologie - morphology）と造語論は厳格に区別し分離して扱われた．大学で 1973 年退任後にこの造語論の分野の著書を準備しかかっていたノートが残っていた．造語論理論の基本から叙述しようとなさったのだが，この造語論の分野は語彙史研究ともっとも密接な分野だと言える．筆者が 1959 年大学入試の面接を始めて行うとき委員の李崇寧教授はドイツ語の原書の‘Ein=leit-ung [序言]’と‘Vor=les-ung [講義]’を読ませてからこれらが何の意味で，何故そのような意味を持つようになったかをわたくしにお尋ねになった．さいわいに高校のドイツ語の時間に造語と語源まで説明を聞いた単語だった．当時先生がそれほど造語論に関心がおありだったという事実を知ることとなったのは何年か後に筆者が大学院生となった時だった．このような作業が基礎となって 1961 年には『高等国語文法』と『中世国語文法』を乙酉文化社から刊行したのだが，その体裁は音韻造語形態及び統辞という構成をなさった．これはアルタイ語学のそれに従ったものだった．造語論は李崇寧先生が韓国では初めて開拓なさった一つの分野であると言える．

一方文献の国語学的研究もかなり進んだが，これを別に単行本としては編纂されなかった．そして基本的には文献学的研究に属する文献中心の国語学史研究は学史の概念の叙述態度等と朝鮮初期の学史まで連載した「国語学史」1～7 篇（『思想界』，1956）以後に文庫版「革新国語学史」（『博英文庫』第 101 号，博英社，1976）に至り先生の最後の論文として見ることのできる「信眉 Sinmi シンミの訳経事業に関する研究」（『学術院論文集』第 25 号，1986）等があるが，国語学関連論文を単行本として別に編纂することはなかった．退任後韓国の国語学史を完全に新しく執筆するつもりだった 200 字の原稿用紙のいくつもの束が単行本として編纂されることなく積まれていた．国語学史叙述関連の論文は『世宗大王の学問と思想：学者たちとその業績』（亜細亜文化社，1981）として編纂もした．その間また発表論文を集めて『国語学論叢』（東洋出版社，1966），『国語学研究』（蛍雪出版社，1972）等もお出しになった．李崇寧先生は一生の間著述よりも論文集としての単行本を多く編まれたのだが，西洋ではヤコプソン(R. Jakobson)がそうだった．

6

ソウル大学国語国文学科の教授を 26 年間務めて 19712 年 2 月ソウル大学院長となり，所属も大学院に変わったが，退任後しばらく仁荷 Inha インハ大学*招聘教授と漢陽 Hanyang ハニャン大学**文理科大学長［学部長］，韓国精神文化研究

院***副院長及び大学院長を歴任し，1979 年から自然保護中央協議会委員長に選ばれ，再びこの関係の論文も発表し，『한국의 전통적 자연관: 한국자연보호사 서설 (韓国の伝統的自然観：韓国自然保護史序説)』(ソウル大学出版部，1985) に含めもした．ここには語彙史と関連ある論文がいくつも含まれている．長編の論文を単行本として刊行した『신라시대의 표기법 체계에 환한 시론 (新羅時代の表記法体系に関する試論)』，『제주도 방언의 형태론적 연구 (済州島方言の形態論的研究)』(塔出版社，1978) 等もあり，大型論文の作成にいつも深い関心を見せた先生でいらっしゃるから『논문 작성과 연구 태도 (論文作成と研究態度)』(博英社, 1976)，そして健康のために登山を楽しまれた先生だから登山関連の随筆を発表したものを編纂した『산이 좋아 산을 타니(山が好きで山に乗る)』(博英社, 1978) 等もある．真に粘り強く勤勉な方だった．70 歳が過ぎても昔のソンビ (士人) のように古い紙も惜しんで使う倹素な方でもあった．

*【注】仁川 Incheon インチョン広域市にある私立大学．1954 年李承晩 Yi Seungman イ・スンマンらによって設立 (仁荷工科大学)，その後 1971 年総合大学へ．

**【注】ソウルにある私立大学．1939 年東亜工科学院，後に建国技術学院，漢陽工科大学を経て 1959 年に総合大学へ．

***【注】1978 年朴正熙 Bag Jeongheui パク・チョンヒにより設立，1980 年大学院を設置，2005 年韓国学中央研究院に改編．

教授生活をする間李崇寧先生にも外部から誘惑もあった．例えば四・一九直後張勉 Jang Myeon チャン・ミョン*政府では先生をイタリア大使として派遣しようとした．そういう時はいつも「松毛虫は松葉を食べて生きなければならない」と信じ，学者としての一本道に固執した．「大学街の番兵」でいらっしゃった．教授以外の仕事を引き受けたのは勿論学界や研究 (支援) 機関の長だった．震檀学会，ハングル学会，国語学会，韓国語文教育研究会，百済開発研究院棟が代表的な場合だった．1980 年代末から肝硬変で苦労なさるうち 1994 年 2 月 2 日明け方に波乱万丈の 20 世紀の現代国語学の開拓者心学李崇寧先生は家族の見守る中で御子息の勤務する韓国原子力病院で静かに目を閉じられた．

*【注】(1899.8.28 – 1966.6.4). ソウル出身．駐米初代大使，副大統領 (第 4 代)，国務総理 (第 2 代，第 7 代)．

一生涯一徹者で通された学問とともに李崇寧先生は自分のその道を守ろうとなさり，その道が正しいことを後学たちを目ざまさせてこうおっしゃった．

「わたしが行く道は一直線の道であろうし，一叢の花も見えない道であり，休もうとしてもこれといった木陰ひとつとてない，そして目標は見えるが行けども行けども終わりのない道かも知れない．この道を倒れて転び，そして粘り強く駆ける野暮ったい田舎っぺがすなわちわたくしであろう．」

この「田舎っぺ」先生は映画「フォレスト・ガンプ」の意志力を呼び起こすこととなるが，高い学問の境地に登られて「謙遜よりは傲慢の方がよい」とおっしゃろうとしているかのようだ．学問を高く積んだ方の堂々とした姿を今でも見るかのようである．故郷の先祖の墓所徳岩山*Deogamsan トガムサンの中腹で「やあ！」と言ってお墓で堂々と，そして静かに眠っていらっしゃる．弟子たちは先生がお建てになった金字塔の大きな影のもとで安息を取り，甘い夢を見，再びまっしぐらに走る田舎っぺになろうとした．先生の 1994 年 2 月 2 日逝去後一周忌に後学たちが建てた「學徳追慕碑」に弟子の李基文 Yi Gimun イ・ギムン教授は師の学問的一生をこう要約した．

*【注】墓所のある京畿道坡州市條里邑（坡州郡條里面）はソウルの西北，板門店 Panmunjeom パンムンジョムの南であり，汶山 Munsan ムンサンのやや南にあり，臨津江 Imjin'gang イムジンガンの南，一山 Ilsan イルサン・アパート団地の北側の地域である．

先生は一生涯科学的基盤の上に新しい国語学を建設しようという一念で生きられたが，古典をあまねく詳考なさることも，全国の方言をくまなく採集なさることも，一般言語学の理論を広く見極められることもすべてこのためであった．

筆者は弟子として先生を追慕し**「李崇寧先生は現代国語学の開拓者であり，父親である．そして科学思想家だった．「国語科学」は今後も命が長いであろう」．**今でもこう信じ，頭髪が真っ白くなった今時折「学者の理想的な場面を想像するならば，老いて机の前で死ぬことを理想としなければならないのだが，万事が数学の計算のようにピタッと合うものではない」という先生のお言葉を時折思い浮かべる．弟子たちは一つの時代を証言する師の影のもとで鎌やシャベルの作業をするのだから幸福である．先生の何人かの弟子たちは多くの時間が流れて 2011 年にやっと師の論著を選んで『心岳李崇寧全集』（韓国学術情報，2011）15 巻を編纂して先生に献呈した．この全集は「音韻，文法，語彙・意味，方言，文献，語学史，生活と思想」の 7 分野に分けてまとめた．師の日には師を慕う弟子たちがお墓参りをして先生を慕って襟を正す．一年に一度ずつ．

（菅野裕臣訳）

（『새국어생활』, 2016 년 제 26 권 제 4 호 겨울, 193-206 페지『新国語生活』，2016 年第 26 巻第 4 号・秋，193-206 ページ）